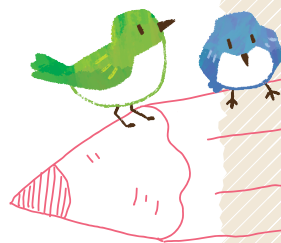




厚生労働大臣賞

中学生の部



「みんなの笑顔のために」

北杜市立甲陵中学校
1年 土屋 ここのさん

私の姉は一歳の時にかかった病気により、右半身麻痺の後遺症が残った。自分で歩くことはできるけれど、長距離を歩くと麻痺側の足をかばって左足に負荷がかかり、その後痛みが苦しみことになる。そのため、長距離を歩く場所では車椅子で移動している。家族は見慣れている光景でも、外出先では周りの人の視線や段差に悩まされることもある。エレベーターは混んでいてなかなか乗れなかったり、可愛い小物を買おうとしても、売り場が狭くて車椅子では入れないお店があったりする。そんな時の姉の口癖は「また今度」だ。諦めるのが早すぎると感じ

と返した姉の声が、今でも私の耳に残っている。いくらバリアフリーが整っていると書いても、安全のために姉の体では乗れないアトラクションもある。「こちゃんだけ、パパと乗っておいで。」と姉は笑顔で言ってくれるが、私は心がチクチクする。けれども、私が父と乗り物に乗っている間、姉は母に車椅子を押してもらって、お土産を選んだりショーを見たりして目を輝かせていた。それを知ってから、気にすることなく別行動ができるようになった。様々な楽しみ方があるこの場所では、多くの人が心の底から楽しめると安心することができたからだ。ディズニールランドでの思い出を振り返ってみると、私の頭の中に浮ぶ人はみんな笑顔だった。姉と過ごしていると、私は「福祉」という言葉の意味を肌で感じる。福祉とは、特別な事情を抱えた人に特別なことをするのはなく、誰もが自然に笑顔になれる環境そのものなのだ。障害のあるなし関係なく、同じように楽しめる場所がもっと増えれば、姉のように外出をためらう人の世界も広がって

るが、これまでの小さな不便の積み重ねから身についてしまった悲しい癖なのだろう。そんな姉が心から外出を楽しめる場所が、ディズニールランドだ。

出発はいつも早朝四時。車にスーツケースを積んで、父が助手席を倒して姉が眠っていけるように準備する。約三時間の道中、私は母と後部座席に座りワクワクしながら目を閉じる。パークの駐車場には車いす利用者のための案内があり、スタッフの方が誘導してくれる。園内は驚くほどバリアフリーが整っていて、殆どの道がスロープ対応。売店で飲み物を買ったときも、車椅子利用者のための優先レジがある。いつも自分は何でもいいと譲ってくれる姉も、ここでは〇〇に行きたい、〇〇が見たいと積極的になる。

一番印象的だったのは、アトラクションに乗ったときだ。キャストの方が姉に優しく声をかけながら、乗り降りをサポートしてくれた。姉は小さな声でお礼を言い、緊張しながらも笑顔で手を振った。乗り終わった後、見送るキャストに、大きな声で「また来ます。」

いく。姉が家の外でも自分の行動を諦めることなく、自信を持って生き生きと過ごしていることが私にとって一番嬉しいことだ。そのために私ができることは何だろうか。ディズニールランドでの姉の姿を見て、私は「諦めようとしている人、自分の願いを飲みこんで誰かに譲ってばかりの人」を見逃さない人になりたいと感じた。そして将来、夢である医師として、患者さんが抱える不安や言葉にできない願いを感じ取れるような存在になりたいと熱い思いを抱いた。

私は、これからも姉といろいろなところに行き、誰かの笑顔のきっかけになれるような世界について考え続けて行動していきたい。患者さんの「こうしたい」という気持ちを大切に、誰もが自分らしく生きられる社会をつくって行くために貢献する。それが、ディズニールランドで姉が見せてくれた最高の笑顔に込める、私の目標だ。